様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　元 年　 ６ 月 １７ 日現在

機関番号：１５５０１
研究種目：挑戦的萌芽研究
研究期間：2016～2018
課題番号：１６Ｋ１３２０３

研究課題名（和文）アメリカ文学のイスラーム

研究課題名（英文）Islam in American Literature

研究代表者
外山　健二（Toyama, Kenji）

山口大学・人文学部・准教授

研究者番号：８０６１３０２５

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,600,000円

研究成果の概要（和文）：研究成果として、イスラームの視点による、エドガー・アラン・ポーの短編「ライジーア」やヘミングウェイの『アフリカの緑が丘』等の分析がある。さらに、アメリカ人作家ポール・ボウルズによる、ラルビ・ラヤチやモハメッド・ムラベらのモロッコ人が語る口語アラビア語から英語への〈翻訳文学〉に見られるイスラーム表象やその究明がある。これらをもとに、〈翻訳文学〉として流通する英語文学を視野に入れ、イスラーム表象に係わる各作品を契機として「アメリカ文学史」の再構築の土台形成を行っている。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究は、アメリカ文学研究で看過されてきた「イスラーム」の視点による「アメリカ文学のイスラーム」研究である。例えば、アメリカ人作家ポール・ボウルズと〈翻訳文学〉研究における北アフリカ・モロッコ社会でのイスラーム表象は、イスラーム・人類学が分析対象とする〈ネイティブ・インフォーマント（現地の情報提供者）〉論と通じるものがある。そのため、隣接学問分野に貢献し、「英語文学」や「世界文学」に通底する学術的意義がある。
　また、「アメリカ文学のイスラーム」研究は、上記のモロッコ社会のようなイスラーム社会を追究することにもなり、アメリカ文学という学問領域に新たな可能性が広がり、学術的に社会的意義がある。

研究成果の概要（英文）：The author’s research includes analysis from an Islamic perspective of the short story ” Ligeia ” by Edgar Allan Poe and Green Hills of Africa by Ernest Hemingway. It also includes examinations of representations of Islam found in literature translated into English by American author Paul Bowles from the colloquial Arabic of Moroccans such as Larbi Layachi (aka Driss ben Hamed Charhadi) and Mohammed Mrabet. Building on that research, this paper uses individual works involving the representation of Islam to construct the foundations for a reconstruction of American literary history covering English literature available as literature in translation.

研究分野：アメリカ文学

キーワード：アメリカ文学　イスラーム

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９、ＣＫ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

（1）国内外の「アメリカ文学のイスラーム」の研究経緯であるが、国外は未開拓であり、国内では平成 25 年度採択の、研究代表者・外山健二（申請者）の挑戦的萌芽研究「アメリカ文学史のイスラーム」がある。この〈文学史〉研究以外、国内外を含め、未開拓である。

（2）申請者の博士論文『ポール・ボウルズの英語圏文学―移動とマグレブ表象』（2006 年 3 月）でアメリカ人ポール・ボウルズ(1910-1999)のマグレブ（北アフリカ）でのイスラーム表象研究をする。その後、筑波大学北アフリカ研究センター客員共同研究員（2006 年 4 月から現在）として、「ワシントン・アーヴィングとイスラーム」のテーマを国際学術会議（2011 年チュニジアで開催）等で研究発表する。研究論文としては、外山健二著、二つの『シェルタリング・スカイ』と表象――「コロニアル・ロード・ナラティヴ」のセクシュアリティと人類学、松本昇・中垣恒太郎・馬場聡編『アメリカン・ロードの物語学』（金星堂、2015 年 3 月）に所収等がある。しかし、イスラームによるアメリカ文学作品解釈の充実とさらなる継続した研究の必要性を痛感する。

２．研究の目的

（1）本研究は、アメリカ文学研究にこれまで看過されてきたイスラームの視座から新知見を見出し、未踏の領域を開拓することが目的である。その目的にはアメリカ文学者に限らず、イスラーム研究者やアメリカ文学関連分野の研究者に新知見を提供する重要な意義が含まれる。

（2）この研究は、平成 25 年度採択（3 年間）の研究代表者・外山健二、研究課題「アメリカ文学史のイスラーム」（挑戦的萌芽研究）を引き継ぐ研究である。イスラーム記述に関する作家と作品解釈をさらに充実させる必要がある。「アメリカ文学史のイスラーム」の全体像および概観を新たに構築するためには、必要不可欠な新たな研究課題「アメリカ文学のイスラーム」である。

３．研究の方法

（1）平成 28 年度は「アメリカ文学のイスラーム」のため、イスラームの視点から個別的な作家と作品解釈を研究する。アメリカ文学史は概して「イスラーム」言説を欠如した「キャノン」(Canon)形成である。イスラームとの偏見・対立・対話等のプロセスから見直すアメリカ文学史の議論が必要である。この調査・研究を平成 25 年度採択の研究課題「アメリカ文学史のイスラーム」で行ったが、さらに継続する必要がある。アメリカ文学作品でのイスラームに関する「見える」記述に加え、これまで「見えなかった」諸作品のイスラーム記述を追究する。作品解釈方法として、たとえば、エドガー・アラン・ポーの短編「ライジーア」（“Ligiea,” 1838）を具体例とする。「アメリカ文学のイスラーム」が重視する 作家と作品解釈の「ライジーア」に関して、次のような解釈方法によってイスラームからのアプローチを充実させる。なぜ「ライジーア」に〈アラベスク〉が記述されるのか。この作品には〈アラベスク文様〉の記述を散見できるが、その〈アラベスク〉には活発な動きが加わる。ポーによるキリスト教的解釈による〈アラベスク〉と解せる。それには、「雑誌文学者」ポーの市場原理や当時のアメリカのナショナリティ言説がある。しかし、〈アラベスク〉という言葉が元々備える〈アラビア〉という意味を考えれば、イスラームの世界観が視野に入る。アメリカ本土の「聖地マニア」言説という時代背景等から〈アラブ言説〉が見え隠れし、イスラーム世界観の中心的な教義タウヒード（神の唯一性）を勘案することで、ポーのアラベスク解釈とイスラームのアラベスクに迫る。

（2）平成 29 年度は、平成 28 年度の研究を継続させ「アメリカ文学のイスラーム」を発展させる。たとえば、アメリカ文学者以外の研究者が注目するアメリカ文学の諸作品の文献調査である。社会/文化人類学者が注目する、ウィリアム・クラーク・タイラー(William Clark Tyler)、通称ロイヤル・タイラー(Royall Tyler, 1757-1826)の『アルジェリアの捕囚』(*The Algerine Captive*, 1797)やマーク・トウェイン(Mark Twain, 1835-1910)の『地中海遊覧記』(*The Innocents Abroad*, 1869)等を視野に収める。

（3）平成 30 年度は、イスラーム記述に関する作品解釈をさらに深め、「アメリカ文学のイスラーム」の完成を目指す。文学史におけるキャノン（正典）を念頭におけば、キャノンは変化し、さらにさまざまなキャノンに発展する。しかし、どのようにして、なぜ、キャノンが構築されたかという問題を検証する必要がある。その検証の過程で、イスラームの排除・対話等がどのように構築されているか、という問題も論証する必要がある。その過程で、権威、国家主義、文学的価値等を検証し、「イスラーム」が看過されてきた諸要素を追究することになる。その経緯を踏まえた、作品解釈が重要視される。

４．研究成果

（1）平成 28 年度は、「アメリカ文学のイスラーム」のため、北アフリカのモロッコで作家活動を行ったアメリカ人作家ボウルズのイスラーム表象を契機として、「英語文学」や「翻訳文学」の可能性を模索しながら、アメリカ文学の新たな研究成果を目指した。平成 28 年 10 月には 20

世紀英文学研究会にて、研究発表「モハメド・ショークリ」『パンのためだけに』を読む――〈翻訳文学〉と 21 世紀英語文学の可能性」を行う。また、平成 28 年 12 月には中・四国アメリカ文学会冬季大会にて「ポール・ボウルズと〈翻訳〉」を行う。分析対象のショークリ『パンのためだけに』(1973)では、主人公の文盲モハメドが、モロッコを舞台にして、極貧でありながらも、暴力的世界で生き残りをかけ苦闘する姿が描かれる。イスラーム圏の男娼というモハメドがアメリカ人とのホモセクシュアルな関係から、被植民者の状況を理解することができ、同時にそれはモロッコの現実を示しているのであり、社会的ドキュメントとなっている。ボウルズの英訳した〈翻訳文学〉である『パンのためだけに』は、モロッコのポストコロニアル状況を考える契機となる。同時にボウルズの人類学的視点は、〈オリエント〉を抹消し、否定する抑圧的姿勢ではない。むしろ、ボウルズは〈作家〉を否認するのではなく肯定する立場である。この生産とは、〈オリエント〉の失われた〈声〉を通して、その言語や習慣を〈翻訳〉するプロセスを辿る。

（2）平成 29 年度は、さらなる「アメリカ文学のイスラーム」の文献調査・作品解釈をする。一層の作品解釈の個別的項目を充実させる。平成 29 年 5 月には日本中東学会第 33 回年次大会にて、研究発表「アメリカ文学のイスラーム――第一次報告」を行う。平成 29 年 10 月には日本アメリカ文学会第 56 回全国大会にて、研究発表「アメリカ文学のイスラーム――第二次報告」を行う。出版物として『21 世紀の英語文学』(2017 年 5 月、金星堂)があり、研究論文・外山健二「モハメド・ショークリ『パンのためだけに』を読む――ポール・ボウルズの〈翻訳〉と 21 世紀英語文学の可能性」が収録されている。その他研究論文として、山口大学『英語と英米文学』（2018 年 3 月）収録の外山健二「なぜ、スレイドは医者か――『世界の真上で』における〈新しきもの〉」、山口大学人文学部異文化交流研究施設『異文化研究』第 12 号（2018 年 3 月）収録の外山健二“Islam in American Literature: First Report”がある。この“Islam in American Literature: First Report”では、19 世紀アメリカ文学を代表する作家ナサニエル・ホーソン(1804-1864) の短編「優しき少年」(1832)を、また、20 世紀アメリカ文学を代表する作家アーネスト・ヘミングウェイ(1899-1961)の『アフリカの緑の丘』(1935) などを取り上げ、イスラーム表象を追究している。ホーソン「優しき少年」の全体を貫くモチーフは、宗教の問題である。登場人物のキャサリンは息子イルブラヒムである〈優しき少年〉を失ってでも、〈神の声〉に従う。この作品に対して、宗教との係りのなかで、人間としての〈情愛〉を読み取ることはできる。キャサリンが、母親として息子に心情を吐露している最中に、息子は〈幸福感〉を母に告げる。ここには〈優しき〉少年の姿がある。しかし、この作品で注目すべきは、当時の多民族国家アメリカを反映するかのように、異人種間の対立の一つの要素にイスラームが存在することである。キャサリンがトルコでイルブラヒムを生んだことを勘案し、イルブラヒムとトルコとの関係を契機に、この作品におけるイスラーム表象を読み取っている。また、『アフリカの緑の丘』は、主人公がヘミングウェイの自伝的小説である。自己実現可能な理想郷は、資本主義がはびこり機械文明で破壊された祖国アメリカにはもう見出す術もない。自己再構築のために原始的な生活空間の場を求めたヘミングウェイは未開の人間になるよう様々なことを試みる。その空間の場では、イスラームの掟が原住民の生き方を抑制する。たとえば、ヘミングウェイは、銃持ちのムコラのゲラゲラ笑いが発端となり、その笑いを、イスラームとの係りでからかいの対象とする。

これらの研究は、これまでのアメリカ文学史研究の成果ともいえる、Sacvan Bercovitch 編の *Cambridge History of American Literature* (8-Volume Set)の文学史等で不十分であるイスラームの視点から作品の解釈説明によって個別的細目のさらなる充実を目指した結果である。これらの研究成果は、イスラーム描写・表象の分析を重要視した。

（3）平成 30 年度は、「アメリカ文学のイスラーム」を再確認し、「アメリカ文学史」の再構築を目指している。これまでの研究成果を見つめ直し、再整理や事実の確認等を行う。同時に、イスラーム記述の調査およびさらなる最新のイスラーム等の先行研究の調査によって、その分析を行っている。また、これまでの研究成果を踏まえ、平成 30 年 6 月には日本比較文学会第 80 回全国大会にて、研究発表「ポール・ボウルズと〈翻訳〉」を行う。研究論文として、山口大学人文学部異文化交流研究施設『異文化研究』第 13 号（2019 年 3 月）収録の、外山健二“Reading Poe’s “Ligeia”: The Orient and “American” American Literature”がある。この分析では、ポーの短編「ライジーア」に見られる、アメリカ本土の「聖地マニア」言説といった時代背景等から〈アラブ言説〉を、イスラーム世界観の中心的な教義タウヒード（神の唯一性）を勘案することで、ポーのアラベスク解釈とイスラームのアラベスクを追究し、アメリカ文学のイスラームを論証している。

イスラームの視点による「アメリカ文学史」再構築には、作品分析を重視した。たとえば、マーク・トウェインと言えば、『トム・ソーヤーの冒険』（1876）は出世作と言えるだろう。したがって、少年向けの物語を書く作家として一躍脚光を浴びたことになる。だが、彼の特色は、小説だけではなく、旅行記にある。トウェインはミシシッピー川流域に定住し、『トム・ソーヤーの冒険』や『ハックルベリー・フィンの冒険』（1885）のように、ミシシッピー川流域を舞台にした作品を生涯にわたって書き続けたと思われていることがあるが、彼が生まれ育った、ミシシッピー州という地域、もしくはその周辺で暮らしたのは、18 歳までである。彼の生涯は 75

年間であるから、彼の人生の４分の１程度の期間が主に、彼の小説家としての特色を表す期間と言える。旅行記作家としてのトウェインを考えれば、『地中海遊覧記』(1869)である。これは、1867 年に、パリ万博、地中海沿岸の南ヨーロッパからクリミア半島、キリスト教の聖地、それにエジプトを回る航海に参加したときに書いた通信記事をもとに、トウェインが旅行記としてまとめたものである。いわば、聖地巡礼ツアーのような旅にもとづく旅行記が書かれたことになる。その背景の一つには、1830 年代から 40 年代にかけて、航海は帆船から蒸気船の時代に、さらに、大西洋航路とインド航路が整備され、1850 年代から 60 年代にかけて、インド航路が中国、日本にまで延長され、アメリカと東アジアを結ぶ太平洋航路が充実することになる。1869 年には、スエズ運河とアメリカ大陸横断鉄道が開通し、船と汽車を使って、世界一周の時代になる。1867 年６月 10 日にニューヨークから出航し、トウェインの旅が始まる。当時かけだしの物書きとしてトウェインには生活がかかっていた。記事を書き『アルタ』に送る必要があった。まず、６月 21 日、最初の寄港地であるアゾレス諸島のオルタに着いた。６月 29 日にはジブラルタルに、７月４日にはマルセイユに着く。その後、パリ訪問で、同市で開催中の万国博覧会の見物が待っていた。このトウェインの旅行記は比較的パリについての記述が多い。たとえば、パリで見たナポレオン３世（1808－73）については、興味を多大に示している。このときパリを訪れていたトルコ皇帝アブドゥル・アジズ（1830－76）ともに、トウェインはパリの凱旋門でフランス軍兵士を見物している。トウェインによると、ナポレオン３世は、ヨーロッパ風に洗練された、威厳のある人物であるが、一方、トルコ皇帝はいやしく、ひ弱そうで、威厳が感じられない人物である。実際、このトルコ皇帝は無能で、国を治めることができず、最後には廃位されて、謎の死を遂げた人物である。その後、ツアーの一行は、ヨーロッパをまわったあと、トルコに寄っている。コンスタンティノープル（現在のイスタンブール）には、８月 17 日に到着する。人でごったがえすせまい道、ごみごみして汚い街並み、漂ってくる臭気など汚い町という印象をもつ一方、コンスタンティノーブルは、ありとあらゆるものが揃い、見る者をあきさせない町として考えている。当時のトルコは、クレタ島の領有をめぐってギリシアと対立関係にあった。アメリカ政府はギリシア政府を支持していたこともあり、トルコ国民の間には反米感情があった。このことがあったからと推測できるが、トウェイン一行はトルコの皇帝に会おうともせず、トルコ国民の感情を害した。9 月７日には、古代都市エフェサスの遺跡をトウェイン一行は見学している。モスクの装飾品を記念品として持ち帰ろうとするが、トルコ政府の役人に没収されるという話を彼は書いている。9 月 10 日には、ベイルートへ行き、そこからシリア領ダマスカスへ立ち寄る。ダマスカスからエルサレムへ行くことになる。そのルートの途中にあるガリラヤ湖周辺には、パンの奇跡の教会、悪霊が乗り移った豚が湖に落ちたクルシ村などイエス・キリストにまつわる遺跡、また、十字軍とイスラームの英雄サラディンが戦ったハッティンの古戦場があった。エルサレムに着くと、彼が最初に訪れたのは、キリストが処刑された丘の上にたつ聖墳墓教会である。ここでキリストにまつわるあらゆるものを発見する。キリストの墓、処刑に使われた本物の十字架、埋葬される前に遺体が安置された塗油の石に使われた釘まで彼は観察する。キリストの遺跡、遺品ばかりではなく、この教会にはアダムの墓まである。全人類の祖先の墓にトウェインは驚くことになる。聖地巡礼の旅の目的が達成された瞬間である。聖墳墓教会を出た後、トウェインはエルサレムの旧市街を歩く。そこでトウェインが出会うのは、イスラームの開祖ムハンマドが昇天した場所として知られる「岩のドーム」（エルサレムの神殿）である。このドームはイスラームの建築物で、エルサレムの象徴とも言え、もっとも目立つ建物である。

トウェインの『地中海遊覧記』の序文からは、オリエンタリズム（東方趣味）を読み取れる。19 世紀の聖地エルサレム巡礼にまつわる「東方旅行」は、オスマン・トルコ帝国の弱体化やイギリスのインド統治、スエズ運河開通 1869 年交通機関の発達などや 19 世紀前半のロマン主義の潮流等が背景にあることは確認できる。だが、この旅行記におけるエルサレムでの貧困で不潔なムスリム（イスラーム教徒）の描写は、トウェインのリアリスティックの姿勢であり、実証的な〈オリエント〉表象に通底する。

（4）総括

アメリカ文学の各作家・作品のイスラーム表象を可能な限り分析を行った。たとえば、17 世紀アメリカ植民地時代のキャプテン・ジョン・スミスのイスラーム表象がある。スミスと言えば、アメリカ植民地時代のバージニア植民地ジェイムズタウンの建設やポウハタン族インディアンとの交流などで知られている。だが、バージニア植民地入植以前に、スミスはオスマン帝国のトルコ人と交流があった。そこにはイスラームに好意的なスミスの姿があり、さらに追究が必要である。次に、アメリカで初めて商業的に上演された喜劇『好対照』(1787)の作者ロイヤル・タイラーである。彼の作品には『アルジェリアの捕囚』があり、二部構成（第一巻と第二巻）である。第一巻は、主人公アップダイク・アンダーヒルの成長物語が中心であるが、船医としてアフリカ西海岸に上陸するや、アルジェリア人の海賊に捕まことが分かる。第二巻は、彼のアルジェリアでの奴隷物語（捕囚体験記）と言える。医者であるという設定でもあるため、アンダーヒルはイスラームの法官と面談する機会を与えられるなど、残虐などからは救われている。彼とイスラーム法官との「宗教論争」からは、イスラーム法官によるキリスト教理解への姿勢を伺える。このようなイスラームへの好意や共感の姿勢を 17 世紀から 18 世紀にかけてのアメリカ文学の作品から読み取ることはできる。

一方、ワシントン・アーヴィング『マホメットとその後継者』(1849)のイスラーム表象をはじめ、トウェイン、ハーマン・メルヴィル、ホーソン、ポーらに見られる、19 世紀アメリカの諸作品では、〈オリエント〉への眼差しが介入する。おおよそ 1798 年のナポレオンのエジプト遠征以来、この曖昧な領域に関与する西欧の人びと「オリエンタリスト」と呼ばれることが多いように、19 世紀前半の「ロマン主義的オリエント」的なイスラーム像が 19 世紀アメリカの作家には見られる。19 世紀半ばから強くなる実証的科学信仰に根ざす「文献学的オリエント」や「帝国主義的オリエント」の色合いは、特にトウェインに見られると言ってよい。20 世紀の作家ヘミングウェイに至っては、「ロマン主義的オリエント」や「帝国主義的オリエント」が錯綜していることは確かである。西欧中心主義に対する、1960 年代以降のいわゆる「第三世界」の視点による反論として、レオポール・サンゴール、エメ・セゼール、フランツ・ファノンなどの黒人知識人等が現れることもあいまって、アメリカでは公民権運動と同時期になるが、その後、サイードの『オリエンタリズム』(1978)が登場する。イスラーム系移民の増加など宗教的多文化主義のなかで、アメリカ宗教における多様性の容認と国家統合のあいだの均衡の問題に対する再検討が求められているなか、アメリカが直面している宗教的多文化主義と統合の問題は、世界の宗教が直面している緊急の課題でもある。伝道や改宗という「宗教的同化」によるのではなく、それぞれの宗教が独自性と宗教的深みをもちながら、どのように他者と共存できるのか。この問いに答えることが、一つの〈新たな〉アメリカ文学史構築の解決策になるだろう。アメリカは現在も〈宗教の実験場〉であり、アメリカ文学のイスラームという研究は、その課題に応える責務がある。

アメリカ文学それ自体の、今後の方向性を考えたとき、〈翻訳文学〉を含めた世界文学という枠組みを看過することはできない。例えば、ポール・ボウルズによるモロッコのムスリム原住民の、口語アラビア語から英語の翻訳への〈翻訳文学〉をみれば、非ムスリムのアメリカ人ボウルズによるイスラームやモロッコ社会の下層階級への理解や共感を読み取ることができる。1960 年代にはいって、ボウルズはタンジールに住む、文盲の現地モロッコ人の少年たちが語る口語アラビア語の物語等に耳を傾け、その英訳を行う活動が中心となる。ボウルズが英訳した〈翻訳文学〉作品には、モロッコ人のラルビ・ラヤチ『穴だらけの人生』(1964)やモハメッド・ムラベ『数本の毛髪の愛』(1967)らがある。『数本の毛髪の愛』は、BBC（イギリス国営放送）でドラマ化されている。ボウルズの翻訳によって、作家と認知されたムラベは、アメリカに移動する機会に恵まれている。彼はアメリカの大学で学位を得、大学の教員職に就く。このような視点をさらに詳細に吟味すれば、アメリカでのムスリムの生き方やアメリカ人との交流の仕方などから、モロッコからアメリカに移動したモロッコ人作家のムスリムがアメリカにおいてどのように生活し、生きているか、またアメリカにどのような影響を及ばしているか等が理解できるだろう。ムスリムと非ムスリムのアメリカ人に関わる歴史や対立などから、文学の在り方を追究する方法も可能となるだろう。

世界文学を視野に入れれば、英語文学の学術的研究は今後ますます必要となる。英語文学は、西洋中心主義のイギリス文学やアメリカ文学といった、国民文学志向の「各国文学」に異議を唱え、ポスト・コロニアルな批評の立場から、旧植民地出身の作家が英語で書いた作品をキャノン化する。英語で書かれた作品であれば、たとえ「第三世界」出身の非白人の作家による作品であっても「英語文学」として認可されるとも言える。このような動きの中で、アメリカ国内のムスリム市民の問題や、そこから可視化されるイスラームは馴染みの薄い〈他者〉の宗教という認識のアメリカ人の存在、さらにはイスラームそれ自体の否定的なイメージなど文学作品を分析対象として、そこに潜む力学やさまざま要素を読み取ることはますます必要である。

アメリカ文学のイスラームを追究するにあたって、アメリカという国家のパラダイムのなかで模索しつつ、ポスト・コロニアルなもの、国際的なもの、グローバル的なものの見方と比較し、アメリカ文学の各作品を丹念に分析するといった方法のほかにも、総じてアメリカ文学のイスラームという枠組みを幅広い文脈で位置付けることが求められる。Greil Marcus and Werner Sollors 編の *A New Literary History of America*(2009)では、アメリカ文学に関するテーマを章ごとに吟味でき、かつアメリカ文学史という通史のなかでテーマごとの関連を共時的に理解できる。このような新しい編集方針によりアメリカ文学史の方向性を考えつつも、イスラームというテーマがこの書には欠如していることは指摘できる。

文学史との関連で、アンソロジーに注目すると、Paul Lauter の *The Heath Anthology of American Literature: Contemporary Period: 1945 to the Present* (2009)が昨今の研究を含意したものである。このアンソロジーでは、特に、〈9.11 事件〉以後の 21 世紀のアメリカが混乱状態に陥った側面を読み取れる。〈9.11 事件〉以後の 21 世紀のアメリカ文学は、一つには〈9.11 事件〉を含めた歴史や文化、宗教等が主要なテーマとなることは間違いない。このアンソロジーの編集企画は 1978 年に始まり、アメリカ文学の再構築がうたわれた。当時の〈アメリカ文学〉観は、狭義的で、支配的であった文学研究を視野に入れた、作家のみをカバーするものであった。だが、時間の経過とともに、このアンソロジーは、文化的変化に呼応する形で、アメリカ人の日常生活を含んだ、文化形態を取り入れ、様々な視点で多くの声を反映させようとする〈アメリカ文学〉観となる。このアンソロジーによる、ドン・デリーロ『堕ちる男』(2007)の登場人物に見られるイスラームの日常性の記述は注目に値するが、〈9.11 事件〉に対し、宗教の問題と捉える立場、ハンチントンのように文明の衝突と捉える立場、あるいは富めるアメリカへの異議申し立てと捉える立場等とさまざまな視点による文学作品へのアプローチが必要である

だろう。このような問題に対し、政治的側面からアプローチを取れば、譲り合う等の現実的な対応が迫られる。経済的側面からは、経済援助等によって、政治的な対応と連動させながら解決策の模索ができるだろう。だが、既存のアメリカ文学史やアンソロジーでこれらの諸課題に対するアプローチを取るものは極めて少ない。

イスラームの視点からアメリカ文学を研究し続ける重要性は看過できない。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計３件）

外山健二「なぜ、スレイドは医者か――『世界の真上で』における〈新しきもの〉」山口大学『英語と英米文学』52 巻、2018 年、pp.53-65

TOYAMA, Kenji（外山健二）“Islam in American Literature: First Report” 山口大学人文学部異文化交流研究施設『異文化研究』第 12 号、2018 年、pp.47-59

TOYAMA, Kenji（外山健二）“Reading Poe’s “Ligeia”: The Orient and “American” American Literature” 山口大学人文学部異文化交流研究施設『異文化研究』第 13 号、2019 年、pp.57-70

〔学会発表〕（計５件）

外山健二「モハメド・ショークリ」『ただパンのためだけに』を読む――〈翻訳文学〉と 21 世紀英語文学の可能性」、20 世紀英文学研究会、2016 年

外山健二「ポール・ボウルズと〈翻訳〉」、中・四国アメリカ文学会冬季大会、2016 年

外山健二「アメリカ文学のイスラーム――第一次報告」、日本中東学会第 33 回年次大会、2017 年

外山健二「アメリカ文学のイスラーム――第二次報告」、日本アメリカ文学会第 56 回全国大会 2017 年

外山健二「ポール・ボウルズと〈翻訳〉」、日本比較文学会第 80 回全国大会、2018 年

〔図書〕（計１件）

外山健二（共著）、金星堂、『21 世紀の英語文学』（収録論文「モハメド・ショークリ『パンのためだけに』を読む――ポール・ボウルズの〈翻訳〉と 21 世紀英語文学の可能性」、2017 年、pp.91-113

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。